通年性アレルギー性鼻炎患者の後鼻漏と咳嗽

○長島圭士郎、内藤健晴、伊藤周史、三村英也、
藤田保健衛生大学 医学部 耳鼻咽喉科学教室

通年性アレルギー性鼻炎において、くしゃみ、鼻漏、鼻閉の3大症状の他に咳嗽やノドのいがいが感などの咽喉頭症状も伴うことが知られている。今回我々は通年性アレルギー性鼻炎患者における後鼻漏の有無、咽喉頭症状の合併率、塩酸オロパタジンがこれらに対してどのように有効性を示すのかを検討した。
当科および関連病院･開業医で、問診･視診等にて通年性アレルギー性鼻炎と診断された55症例で検討した。患者にアレルギー日記を配布し自己評価による症状の種類と程度、および塩酸オロパタジン5mgの服薬状況を昼と夜の2記入させた。2週後に受診とし、担当医が再度症状や所見を記録した。症状スコアは、鼻症状は鼻アレルギー診療ガイドラインにそって5段階評価した。咳嗽は発作回数を5段階評価し、咳嗽の性状も記載させた。ノドのいがいが感、後鼻漏は強く感じる、少し感じる、感じないの3段階で評価した。
通年性アレルギー性鼻炎患者の67%が後鼻漏を自覚していたが、咳嗽と後鼻漏に有意な相関は認めなかった。鼻閉感と咳嗽に相関がないことや、抗ヒスタミン薬による咳嗽の治療効果が後鼻漏や咽喉頭異常感と若干異なった経過を示すことから、通年性アレルギー性鼻炎患者の咳嗽は、後鼻漏による直接的な影響や、鼻閉による口呼吸からくる乾燥の影響ではない別の機序による可能性が考えられた。またその咳嗽は抗ヒスタミン薬によって抑制されることから、喉頭アレルギーの可能性が推察された。